
血も滴るいい女

春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血も滴るいい女

【Nコード】

N6939A

【作者名】

春

【あらすじ】

学園一の美少女は、ある日を境に他の誰からも話しかけられなくなった。その理由は、学園中に広まっていたのだが、一人の少年だけがその理由を知らなかった。

誰もが認めるほど彼女は美しい。さらさらとした髪、今にも吸い付きたくなるような唇、ぱっちりとした瞳、整った鼻、眉……。まるでフランス人形であるかのような美貌は学園中の男子や女子の憧れであった。

二日前までは。

今日の天気はまずまず。良くも悪くもないと言ったところだろうか。学校についた少年たちは朝から元気がない。そんな中、一人だけ元気な少年がいた。

「どうした矢口！！元気ねえぞ」

「仕方ないよ。ほら、アレ見てみろよ」

矢口と呼ばれた少年に話しかけた、どう考えてもゴリラにしか見えない少年は、その指が指す方向を見た。

「あん？学園のアイドルじゃねえか。どうかしたのか？」

「どうかしたのかって……。オマエ、何も知らないのか？」

「はあ？何の話だ？」

「そうか、知らないほうがいいこともあるよな……」

「え？何の話なんだよー！！」

「知らぬが仏ってヤツだ。気にするな」

「気になるだろうが！！」

「教えて欲しいのか？」

「おう。そりゃもちろん」

「なら直接聞いてこい」

そう言った途端、ゴリラのような少年は顔を真っ赤にした。

「無理に決まってるんだろ！！俺が女子に話しかけるのが苦手なの知ってるくせによ」

「でもな……俺は人から聞いた話は真実かどうかわかんねえと思ってる。だから噂は人には話さないことにしてるんだよ」

「そうか……。わかった。なら矢口に聞く」

「ああ、矢口もダメだ。俺と同じ口だからな」

「はっ？矢口もダメなのかよ……」

「しょうがねえんだよ。ことがことだからな」

「ふん」

「知らないほうが身のためだと思うぞ」

「……」

「……」

「俺、何があつたか聞いてくる！！」

ゴリラのような少年はその美少女のところへと駆け出した。

「まったく。何があつても俺は知らねえからな」

少女の席まで来たものの、何を話せばいいのかわからない。彼は話しかけようかどうか困惑した。だが意を決し、少女に話しかけた。

「ねえ、何かあつたの？」

「……」

「困ったなあ……。俺だけ仲間はずれか……」

「……」

少女は黙ったまま正面を見ている。まるで他のすべてのものを拒否するかのように。

「ねえ、聞いてる？」

「……」

「ひょっとして、喋れなくなったとか？そうだったらゴメン……」

「……」

「俺、何も知らねえんだ。最近みんながオマエによそよそしくなっ

たくらいしか」

「……えっ？」

少女は正面を向いていながらも一応は彼の話を聞いていた。というより、彼の声が大きすぎて聞こえてしまっていたのだ。

「お、なんだ。喋れるじゃねえか」

「……」

「……なあ、だから何があつたか教えてくれんか？」

「……」

「ここでは話しづらいかもしれないな。放課後に屋上にいるから来てくれよ」

だが、彼の問いかけに少女は反応しなかった。そして、まだ正面を向いたままだ。

「いいな！！待ってるからな！！」

彼は少女にそう言つて、自分の席へと向かった。

「うゝ、暑い……。なんで夕方なのにこんなに暑いんだあ？」

少年は、屋上にいた。太陽はまだ高く、あたりを照らす。そのせいで、地表が熱くなつてしまっているのだ。

「早く来ないかな……アイツ」

少年は不安と緊張と興奮の三つの間で葛藤していた。……そのとき、屋上の扉が開いた。

「来たかつ！？」

扉が開いた瞬間、少年は扉まで駆けた。そこには、この学園一の美少女がいた。

「来てくれてありがとうな」

「……」

「来てくれないかと思ってたよ。俺、こんな顔だしさ」

少年は自分の頬を両手で引っ張る。少女の顔が少し緩んだかのように見えた。

「でさ、話、聞かせてくれよ」

「……」

「……」

「後悔しても、知らないからね？」

「……ああ、わかった」

「……つい最近、大虐殺した犯人が捕まったとかいうニュースがあったじゃない？」

「ん？ああ、あれか」

「それって……私の父親なのよね」

少年は目を丸くした。あんなことをした大虐殺事件の犯人の子供が、こんなに身近にいたなんて……。そんな顔をしていた。

「……」

「でもね？初めはみんな優しく接してくれたの。『大丈夫だ』『キミは悪くない』って」

「そうなんだ。全然知らなかったよ……」

「……」

「……え、でも？それならなんかじつま合わなくねえか？」

「ええ、問題はそこからのな」

「何があつたんだ？」

「ヴァンパイアって知ってる？」

「え？なんだそりゃ？……いや知ってるけどよ」

「ならよかった。私もよく知らないんだけど、ヴァンパイアって吸血鬼とか言われてるけどそのヴァンパイアって名前の人は相当な美女だつたらしいの」

「へー、そうだったのか」

「でもね、他人の血を飲むとさらに綺麗になれると知ったヴァンパイアは美しさを求めるあまり、人の血を吸ったんだって」

「怖い話だな……」

「……それで、私の父親も、私に……」

「……え？話が読めないんだけど……」

少女の話はそこで一時中断した。少女の瞳から水が溢れかえり、

ややあつて、地面へ落下した。

「なあ、一体どうしたんだよ？」

「……」

「オマエの父親は、オマエに何をしたんだ？」

「血を……」

「ん？」

「私に血を飲ませたの」

「……」

少年は青ざめた。悲鳴をあげるわけでもなく、逃げるわけでもなく、ただ顔を青くさせたただけだった。

「あはは、驚いてるね」

「……」

「だから聞かないほうがよかったんだよ」

「……」

少女は笑っていた。何かがふっきれたのか、とても楽しそうに笑っていた。

「私だつてさ、望んで飲んだわけじゃないのにね」

「……」

少年の顔は恐怖に満ち溢れていた。彼女の言うことは正論だ。…

…だがやはり怖いものは怖いのだ。

「ね？キミもそう思うでしょ？」

「そうだね……」

やつと口を開いた少年はそれだけしか言えなかった。そして少女は放心状態の少年に話しかけた。

「でもね、私、気付いたんだ」

「……」

「私には血が必要なの」

「……」

「だから……ね？」

「ああ……わかった」

次の日の昼ごろ、警察署がパニック状態になっていた。

「被害者、特定できました!!」

「ん……遺族の方に連絡を取れ……」

「了解」

下っ端なのか、その命令された警察官はすぐさま電話に手をかけた。

「……一体どんな風に殺られたんだ？オマエ……」

そう言って、警察官は持っていた被害者の写真を机の上に放り投げた。

写真に写っていたのは、顔以外ぐちゃぐちゃにされたゴリラのような少年だった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6939a/>

血も滴るいい女

2010年10月8日15時46分発行